

ON-3-4

片麻痺のあるマスターが働くカフェが及ぼす地域への影響

—交流の場から相談、見守りの場への醸成過程—

Association between the community and the cafe master with hemiparetic patient

—process from the place of exchange—

○石山満夫 (OT), 石浜実花 (OT)
千里津雲台訪問看護ステーション

Key words: 地域活動, 障害者, コミュニケーション

- 1.はじめに 平成20年,千里ニュータウンには気軽に高齢・障害者が交流できるカフェが少なかった.高齢・障害者の活動参加推進のため商店街にある千里津雲台訪問看護ステーション(以下訪看)に障害者をマスターにしたカフェを併設した.
- 2.目的 片麻痺のあるマスターが働くカフェが及ぼす地域への影響を明らかにする.
- 3.対象・方法 平成20年12月から現在まで運営している当カフェを対象に①経緯,②内容,③相談例,④利用者アンケート,⑤売上を調査した.なお,①から③はカフェ担当職員から聞き取り,④カフェ利用者に実施したアンケート内容は,年齢・性別,既往歴,介護経験,来店理由,訪看・リハの周知,自由記載とし,口頭と書面で説明し,学会等発表の了解を得,倫理的配慮を行った.
- 4.結果 ①経緯:平成20年10月,訪看の移転先の空き空間を高齢・障害者が気軽に立ち寄れるカフェを目指し調理師の有資格者を食品衛生責任者にした.障害をもちながら一般就労に挑戦する風景を日常化するため,ハローワーク障害者雇用制度で喫茶マスターを求人した.求職した2名を面接し接客好きなA氏を採用し開設. A氏に話を聞いてほしい利用者が増え,平成23年より月1回,傾聴ボランティアも導入. カフェの地域化に向け,府事業の「うちのお店も健康づくり応援団の店」,市事業の「こども100番の家」,「高齢者支援事業者との連携による見守り事業」並びに「徘徊高齢者SOSネットワーク事業」に登録.平成27年11月より地域包括支援センター主催の認知症カフェを開始した.②内容:平日午後12時半から18時まで営業.右片麻痺のA氏が片手で可能なエプロンの着衣法,配膳,片付け・調理メニューを改良.1か月後オープン.メニューはコーヒー,紅茶,カレー,ピラフ等.午前中は同じ空間で自費の通所リハを実施している.設備は身障トイレ,テーブル,ピアノ,健康器具等があり,毎日正午過ぎに模様替え実施.カフェは通常A氏が仕切り,対応しきれない相談は2階にいる療法士等職員が対応.③相談例:開設時は,詩吟を吟じたい,ピアノを弾きたい,健康器具の使用等,自己表出や備品の利用の質問が見られた.経過とともに「遠方の親が弱った.介護保険を利用するには」,「受診のため介助用車いすを貸してほしい」等,身内の相談が増えた.次第に,通行人から「倒れたままケガした人がいる」,「溝にはまって家に帰れない人がいる」,「自家用車を停車し駐車場で住んでいる」等,見守りや防犯の事項の問い合わせが増えた.④利用者アンケート:16人回答.男女合わせ多い順に60代5人,70代4人,80代3人の順.入院するような病気やケガのある者は4名,ない者11人.介護経験あり6人,なし10人,来店理由は,マスターの人柄・なじみ14人,コーヒーが飲みたい10人,休憩9人,話がしたい8人,訪看・リハの周知は,自費通所リハを知るが12人,PT,OTの勤務及び階上の訪看を知るが各々9人.自由記載は「もうちょっと入りやすい喫茶店に」,「歌声喫茶を」等,要望が見られた.⑤売上:月平均売上額は,開店半年は3万円台.以降現在まで5万円台を維持.赤字決算のため,訪看収入から補てん.
- 5.考察 影響①:利用者は高齢者が多く,障害者が働く姿は,体に弱りを感じる者に親しみと希望を与えた.影響②:交流の場から相談,見守りの場へと変化.行政事業登録店であり,かつ専門職につながることで住民に安心感を及ぼした.

今後,「認知症カフェ」等,専門特化した時間帯を設け,障害者と専門職が関与する参考例として各地区に展開できるよう普及・啓発していくことが課題である.